

Sumitomo Foundation News Vol.21

ホイアン日本橋の修復

ベトナムのホイアンにある「日本橋」をご存知でしょうか(写真)。ホイアンは、かつて国際貿易で栄えた古い港町で、中国、日本、西欧など様々な様式の建物が遺されており、街全体が世界遺産として登録されています。その中でもこの橋は、ベトナムの2万ドン札にも印刷されるなど、ベトナム国内外で有名な観光スポットです。現地では通常「来遠橋」と呼ばれています。16世紀末に建設された橋で、日本人町に通ずる橋として、日本人が架けたとも言われており、日越友好のシンボルにもなっています。

住友財団では、2020年度に、この橋の解体修復工事に伴う費用を助成しています(助成額30,400米ドル)。先般、完成披露式典が開催され、同じく修復事業を支援した文化庁、JICAと共に感謝状を受領しました。

完成披露式典に出席した来賓の半分は日本からの出席者で、本修復に日本が果たした役割の大きさを感じました。日本円にして1億円強と言われる全体の修復費用と比較すれば、住友財団の助成金は僅かなものではありませんが、橋自体の修復のみならず、日越の友好関係を更に深めることにも繋がったとすれば、効果的な助成だったと言えます。

金額は少ないとしても、より大きな波及効果を生むことのできる助成活動を継続していきたいと考えています。



修復されたホイアン日本橋の全景



完成披露式典にて支援者への感謝状贈呈
(左2人目から文化庁、住友財団、JICAの代表者)

主な活動内容 (2024年8月～10月)

8月	2024年度 環境研究助成 第2回選考委員会開催
9月	2024年度 基礎科学研究助成 第2回選考委員会開催
9月～10月	2024年度 アジア諸国における日本関連研究助成 募集
10月	第68回理事会開催
10月～11月	2024年度 国内外文化財維持・修復事業助成 募集 2024年度 修復文化財展示事業助成 募集

基礎科学研究助成

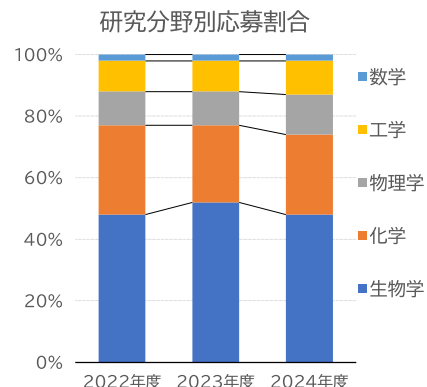
2024年度も、4/15～6/30募集、その後の選考を経て、10月理事会で助成対象が決定されました。昨年度からの変更点としては、助成期間2年を新設し、応募時に1年または2年の助成期間を選択できるようにしたこと、選考委員会の委員長の交代があり、東北大学の大隅典子副学長が新しい選考委員長になられたことなどがあげられます。

【応募状況】

応募件数は979件と昨年度より59件増加しました。分野別に見ると、化学が22件、工学が21件、物理学が20件増加し、生物学と数学は2件ずつ減少しました。この結果、生物学が圧倒的に大きな割合を占める状況に変わりはありませんが、昨年度の52%から48%に減少しました。

申請金額の平均は348万円と昨年度より14万円増加し、過去最高を更新しました。物価の上昇に加え、助成期間2年の新設がその要因と考えられます。

応募者の平均年齢は40.9歳、昨年よりさらに0.3歳高くなりました。



【選考・採択状況】

選考は、例年通り選考委員長を含む13名の選考委員によって、2回の選考委員会を通じて実施されました。選考委員会の構成メンバーが、選考委員長を含め7名入れ替わり、初の女性委員長のもとでの選考委員会となりました。今年度の採択件数は71件となり、昨年から14件減少しました。採択件数の減少は3年連続となっています。助成金総額は1.5億円で変わっておらず、助成金額の1件平均211万円は、1995年度以来の200万円超えとなりました。助成金額充実への意識が反映されたものと考えられます。

また、助成対象者の平均年齢は39.2歳となり、昨年から0.5歳低下しました。応募者の平均年齢が昨年より0.3歳高くなっていることを考えると、若手優先の採択意識が反映されたものと考えられます。

【採択された研究事例紹介】

最近米不足が話題になりましたが、イネに関する研究で今回採択された女性研究者をご紹介します。

広島大学 大学院統合生命科学研究科 准教授 田中 若奈さん

研究テーマ:「植物ホルモンの役割から探るイネ腋芽幹細胞新生の分子基盤」

○応募のきっかけ

住友財団のホームページから、本研究助成が、基礎科学分野の若手研究者による萌芽的な研究を積極的に支援していることを知りました。その理念に深く共感し、私の研究に適した助成制度であると感じたことが応募のきっかけです。

○助成が決まった感想

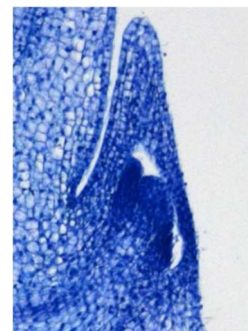
自身の研究の重要性を評価していただいたことを大変嬉しく思っております。この機会を通じて、良い成果を上げられるよう一層努力する意欲が高まりました。

○この研究テーマを取り上げた理由

植物の発生・成長には、各種の幹細胞の働きが重要です。しかし中でも、植物の枝を生み出す「腋芽幹細胞」に関する研究は非常に限られており、その新生に関わる遺伝子の仕組みについては十分に解明されていません。私たちのグループでは、以前からモデル植物イネの腋芽幹細胞に着目した研究を行ってきましたが、その研究の過程で偶然、ある植物ホルモンが腋芽幹細胞の新生に関与している可能性が浮上しました。この植物ホルモンの役割を詳しく調べることで、腋芽幹細胞の新生の仕組みをより深く理解できるのではないかと考えたことがこのテーマのきっかけです。

○この研究の可能性と今後やりたいこと

イネの腋芽幹細胞に関する基礎研究は、イネの品種改良にも貢献する可能性を秘めています。腋芽幹細胞の新生は枝の形成につながり、枝の形成はお米の収量に直結する穂数を決定する重要な要素であるためです。まだまだ先のお話ですが、将来的には、本研究によって明らかにした腋芽幹細胞の新生の仕組みを活用して、お米の安定供給や増産につながる育種技術を開発できればと考えています。



イネの腋芽幹細胞組織
(青い色素で染色)

環境研究助成

2024年度も、例年通り4/15～6/30募集、その後の選考を経て、10月理事会で助成対象が決定されました。

【応募状況】

一般研究の応募状況は、330件(前年度比△2件)とほぼ前年度と同水準となり、右表の通り、今年度も多岐にわたる分野の申請がありました。

課題研究は、「人類喫緊の課題である温室効果ガスの大気圏への蓄積の抑制に向けた学際研究または国際共同研究」を募集課題とし、従前より範囲を大きく絞った結果、23件(前年度比△5件)と大幅な減少となりました。

【選考・採択状況】

今年度の選考も、昨年同様、選考委員長を含む7名の選考委員によって2回の選考委員会を通じて実施されました。採択は、一般研究が34件(総額7千万円)、課題研究が3件(総額3千万円)の合計37件(総額1億円)となりました(前年度は一般研究35件、課題研究4件の39件)。

一般研究については、応募数、採択数が、前年とほぼ同水準となり、採択率についても、前年度の10.5%に対して10.3%となりました。分野は、自然科学系30名、人文社会科学系4名となり、所属機関別では29機関に分散しております(最大は立命館大学3件)。採択者の平均年齢は45歳となり、34歳から76歳まで幅広く分布しております。また、女性の採択者は6名となり、女性の採択率11.3%は、全採択率10.3%を若干上回っております。助成金額は、平均206万円、最大450万円、最小70万円となり、申請額に対する充足率の平均は56%となりました。一方、課題研究については、研究の実現性が認められ、かつ社会実装性も兼ね備えた3研究が採択されました。2025年度の募集課題は「地球のネイチャーポジティブを実現するための学際的または国際的研究」の予定です。

【採択された研究事例紹介(一般研究)】

神戸大学 大学院人間発達環境学研究科 助教 佐賀 達矢さん

研究テーマ:「スズメバチ類の食性解析から絶滅危惧種・外来種をモニタリングする」

(研究概要)

昆虫相のモニタリングは、これまで採集という非常に時間と労力がかかる方法で行われてきましたが、本研究では、スズメバチ類の巣が社会において積極的に駆除されていることに着目し、駆除されたスズメバチ類の巣や幼虫の消化管内の糞の食性解析を通じて餌種を一挙かつ大量に特定するという、昆虫相の効率的なモニタリング手法を提案するものです。これまでの人間中心のモニタリングから発想を転換した大変ユニークな研究で、研究計画も確りとしており大きな研究成果が期待されます。



○応募のきっかけ

本助成はテーマや分野に制限がないため、私の萌芽的な課題も受け入れられる可能性を感じました。年変動が避けられない野外調査を計画しており、2年間にわたってまとまった金額の支援をいただける点は魅力的でした。

○助成が決まった感想

私はスズメバチをいわば生物相調査員として利用することを考えています。このアイデアは7年前に思いつきましたが当時は高校教諭をしており、なかなか進められず、この度は研究の機会が得られ、とても嬉しいです。

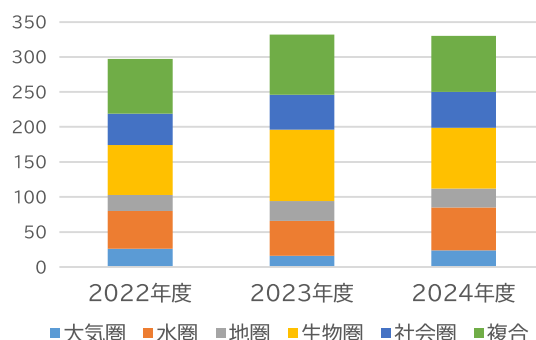
○この研究テーマを取り上げた理由

私は博士号取得後、スズメバチ類の食文化がある岐阜県東濃地域で高校教諭として働いていました。私自身も地元の蜂愛好会に入り、様々なスズメバチ類の幼虫と蛹(蜂の子)を採集し、食べてきました。ある時、オオスズメバチの幼虫を腸を取り出さずに食べ(その幼虫は甲虫を食べており)、口の中で甲虫の断片がジャリジャリして腸の中には様々な生き物が入っていることを身をもって実感したことなどが本研究テーマに繋がっています。

○この研究の可能性と今後やりたいこと

本研究を行った上で、蜂駆除を公費負担していたり、生物多様性に関心があったりする自治体と協力して蜂の巣を用いた生物相モニタリングを行いたいと思っています。また、国内外でスズメバチ類の蜂の子は秋のご馳走として食べられており、愛好家は食用に採集する際には殺虫剤を用いませぬ。その採集方法をマニュアル化・効率化し、駆除した巣を食資源、生物相モニタリングの資源として利用する研究を行いたいと考えています。

環境研究(一般研究)分野別応募件数推移



アジア諸国における日本関連研究助成

ネパール初訪問

「アジア諸国における日本関連研究助成」では応募勸奨や各国の最新の状況を把握するため、例年アジア各国に出張しております。

応募者数の多い、マレーシアやインドネシアなどについては、1～2年に1回のペースで訪問しておりますが、応募数が少ない国々につきましては、訪問する機会がほとんどありません。近年では2019年にモンゴルを訪問しましたが、コロナ禍の影響もあり、その後は応募数の多い国のみの訪問となっております。

今回は2022年度に採択されたトリブバン大学の採択者へのヒアリング、および同校での応募勸奨説明会を開催するため、ネパールを住友財団として初めて訪問いたしました。

住友財団からの初訪問ということで大歓迎されました。また、ネパールにおける日本関連の研究状況などについて情報交換をすることができ、貴重な機会となりました。今回の訪問については、地元のメディア(英語、ネパール語)にも取り上げられ、関心の高さがうかがえました。



住友コンフェレンス 2024

昨年に続き2回目となる『住友コンフェレンス2024』が10月12日(土)に開催されました。「アジア諸国における日本関連研究助成」の延長線上の取り組みとして、過去の助成対象者の研究成果を共有し、同じ分野の研究者同士や選考委員が接する機会を醸成することを目的にオンラインにて開催しました。企画運営は昨年と同様に東京大学東洋文化研究所の「Global Asian Studies」プログラムとの共催形式にて、実施されました。

今回の発表者は2019年度の助成者を対象に、優れた研究成果報告の中から『文化の比較から持続的な発展へ』というサブテーマを横串に5名が選出されました。

当日は第一部(日本語)・第二部(英語)ともに約50名が参加。リード役(司会、討論者)のスマートな手引きのお蔭で双方向の有益なコミュニケーションがなされ昨年より進化した形になったと思われます。さらに改善できる点は見直しながら来年度以降も継続開催していく予定です。

【当日のプログラム】 10/12(土) 13:00～16:00

*司会 園田茂人教授(東京大学)

*挨拶 当財団 日野常務理事・事務局長

セッション1: 日本研究における「比較の力」(日本語)

*孫栄爽(韓国 済州大学校)「マルチメディア・コーパスによる発話時非言語行動の日韓対照研究」

*楊素霞(台湾 国立政治大学)「民主化移行期の台湾にとって明治維新とは何か:脱植民地化と民主化プロセスの交錯」

*討論者 澤田ゆかり教授(東京外国語大学)

セッション2: 日本とアセアンを比較する(英語)

*アーウィン・アルディ・アランパイ(フィリピン大学)「日本とフィリピン地方政府の災害関連CSRプロジェクト実施の比較研究」

*クアン・セン・ハウ(マレーシア トウンク・アブドゥル・ラーマン大学)「日本とマレーシアのプラスチックリサイクルの比較研究:現状、課題、機会」

*クワック・ティ・スアン(パシフィック・エンバイロメント ベトナム国代表、ベトナム・ゼロウェイスト・アライアンス コーディネーター)「日本の廃棄物焼却と固形廃棄物管理:ベトナムにとっての教訓」

*討論者 山本博之准教授(京都大学)

